

言語グローバル化進まぬ日本

耳から学ぶ習慣を

国際教養大学長

中嶋嶺雄



なかじま・みねお 36年、松本市生まれ。東京大大学院修了。東京外国語大学長などを経て、現職。専門は国際社会学。著書に『北京烈烈』『国際関係論』『21世紀の大学』など。

空路ではわずか二、三時間、欧米からすれば見分けが難しい日本・韓国・中国といった東アジアの近隣の人々の間にあっても、使用される言語は全く異なっていて、それを学ばなければ十分なコミュニケーションができない。

一方、いまや国際語ないしは普通語となっている英語をツール(道具)にすれば、ITの進化もあって、東アジア域内はもとより、全地球規模でも即座にコミュニケーションが可能になる。

と、グローバルな言語としての英語のポジションはもはや争う余地がないのであって、国民の英語力がGDP(国内総生産)などの数値と並んで、国力の比較指標になる時期がやがてくるだろう。

中国、台湾、韓国など東アジアの近隣地域のみならず、東南アジアなどの非英語圏諸国でも、グローバル化の時代に英語力をどう高めるかについて、真剣な検討や取り組みがなされている。私はこの夏、タイのバンコクで開かれた国際会議の基調講演に招か

れたが、会議のテーマは「グローバル文化のなかでの言語ブリッジかバリアか？」というものであった。作家の水村美苗さんが文芸誌「新潮」九月号に発表した論考「日本語が亡びるときー英語の世紀の中で」も、この問題に鋭く迫っていた。

さて、わが国では小学校への英語教育導入をめぐる、英語よりも国語をとか、英語をやると日本語がダメになるといった議論が依然としてあるようだ。しかし、オセロなどのゼロ・サムゲームのように母語か英語か、といった議論の段階にもはやとどまっていなければならない。

そこにとどまっていれば、これからのグローバル化の時代に、わが国の若者や子どもたちを、常に英語コンプレックスに落ち込ませてしまいかねないからである。

さて、わが国では小学校への英語教育導入をめぐる、英語よりも国語をとか、英語をやると日本語がダメになるといった議論が依然としてあるようだ。しかし、オセロなどのゼロ・サムゲームのように母語か英語か、といった議論の段階にもはやとどまっていなければならない。

さて、わが国では小学校への英語教育導入をめぐる、英語よりも国語をとか、英語をやると日本語がダメになるといった議論が依然としてあるようだ。しかし、オセロなどのゼロ・サムゲームのように母語か英語か、といった議論の段階にもはやとどまっていなければならない。